

「西泠印社建社一二〇年慶祝大会」参加報告記

藤井郁子

1 記念大会の概要

二〇二三年一月一日、杭州之江飯店にて、「西泠印社建社一二〇年慶祝大会」が開催された。筆者は日本篆刻家協会訪中団の一員として、二〇二三年一月九日から一四日までの六日間、中国に滞在し、西泠印社の記念大会に参加するとともに、記念大会にあわせて開催された一連の展覧会を観覧した。その様子を以下に報告したい。

西泠印社の記念行事は五年ごとに開催されている。今回はとくに双甲子である一二〇年という節目の年であり、これまで以上の盛大さが期待された。

今回の建社一二〇年記念大会の会場は、一一五年の時と同じく、西湖から車で一五分ほどの市街地に位置する杭州之江飯店の五階「千人会堂」であった。舞台上には「慶祝大会」の紅い横断幕を背

に、主催者、来賓のために三〇数席が二列にわたり設けられていた。また、参加者の席は「西泠印社社員・名誉社員」「港澳台嘉賓」「海外嘉賓」「兄弟印社嘉賓」「其他嘉賓・工作人員」「媒体」に区切られていた。参加者は、四〇〇名ほどの西泠印社社員、名誉社員を含め、合計約六七〇名におよぶ規模であった。



図1 西泠印社建社120年慶祝大会の様子

大会は午前九時三〇分頃、杭州市党委員会常務委員会委員、宣伝部部長の黄海峰氏の進行により始まった。まず、中国文学芸術界連合会副主席、中国書法家協会副主席、中国文芸評論家協会副主席、浙江大学人文学院院长の肩書きをもち、西泠印社副社長兼秘書長を務める陳振濂氏が開会の挨拶を行った。つづいて、杭州市党委員会宣伝部常務副部長であり西泠印社党委員会書記、副社長、社務委員会主任を務める龔志南氏が各界からの祝電を紹介した。

海外の来賓からは、日本からの参加者で、このたび西泠印社名誉副社長に新たに就任した高木聖雨氏が代表して、祝辞を述べられた。祝辞は、西泠印社が結社以来、現在に至るまで中国の芸術をリードする集団であること、日本との交流も古く、呉昌碩先生に師事し西泠印社創立時の発起人の一人であった河井荃廬、名誉顧問・青山杉雨、名誉副社長・小林斗盦、梅舒適をはじめ多くの日本の理事、社員が生まれていることに言及し、また、一九八〇年、呉昌碩先生胸像復元委員会が組織され、西泠印社に胸像贈呈を行ったことを取り上げるなど、西泠印社と日本との歴史的な関係が簡潔にわかる内容であった。祝辞の最後には、翌年の二〇二四年が呉昌碩生誕一八〇年であることから、高木聖雨氏が理事長を務める謙慎書道会により、日本では紹介したことのない呉昌碩作品を展観する展覧会が行われる予定であることを紹介し、先人の思いを受け継いでいく決意を表明して締めくくられた。この祝辞は日本語で述べられ、中国語に通訳された。

つづいて、浙江省党委員会副書記、杭州市党委員会書記の劉捷氏、

浙江省党委員会常務委員、宣伝部部長の趙承氏が挨拶され、約一時間にわたる記念大会は終了した。

2 関連する展覧会について

記念大会終了後、会場を移動し、西泠印社建社一二〇年系列展を観覧した。この記念大会に関連する一連の展覧会は、「西泠印社百廿成果滙報展」「西泠印社社員作品展」「西泠印社社藏捐贈菁華展(2019-2023)」「2023海内外印社聯展」「君匋芸術院藏叢翠堂四家名印展」の五つであった。

まず、「西泠印社百廿成果滙報展」を観覧した。この展覧会の入り口には、第四代西泠印社社長の沙孟海が書いた題字がかかる西泠印社の正門が再現され、西泠印社に入って観覧するような工夫がなされていた。また、これまでの記念大会の際に撮影された集合写真が展示されるなど、西泠印社が建社された一九〇四年から現在の二〇二三年に至るまで、西泠印社一二〇年の歴史が概観できるような展示になっていた。歴代社員のサイン一覧も展示されていた¹⁾。



図2 「西冷印社百廿成果滙報展」の様子

次に、「西冷印社社員作品展」を観覧した。この展覧会は社員一人につき一点の展示で、歴代社員の作品六二四点が展示されていた。現社員の作品は、篆刻作品が二五六点、書画作品が一二六点であり、かつての社員の作品は二四二点であった。また、四〇冊の書法理論著作も展示されていた。

歴代社員の書画作品はそのほとんどが軸作品であったが、額に入られての展示であった。また、篆刻作品は人により、印屏の展示と、原印の展示とにわかれていた。原印はガラスケース内での展示で、原印の横には、原寸大の印影、側款拓と作者、釈文、尺寸が書

かれたキャプションが置かれていた。さらに、印面と側款を拡大したパネルによる展示もあり、作品を印象づける工夫がなされていた。この展示は作品数が多く、時間の制約もあったため、じっくりと鑑賞できなかったものもあるが、ここではその中でとくに印象に残った作品三点を挙げておきたい。

一点目は、西冷印社初代社長の呉昌碩の「紅白二株墨梅図」である。この作品は、落款から五四歳の時、すなわち西冷印社結社前に書かれたものであることがわかる。『呉昌碩全集』⁽²⁾にも掲載されている作品であるが、墨の濃淡を使い、紅白の梅が見事に表現されており、作品集からでは感じとれない、筆遣い、墨色などを実見により知ることができた。

二点目は、日本を代表する篆刻家である梅舒適の「金石楽 書画縁」である。筆者は梅舒適の研究をしているが、この作品はこの展覧会ではじめて見るものであった。梅舒適は一九八一年から一九八五年まで西冷印社名誉社員に、一九八五年から二〇〇二年には西冷印社名誉理事に、二〇〇三年から亡くなる二〇〇八年までは西冷印社名誉副社長に就任しており、西冷印社との縁が深い人物であった。「金石楽 書画縁」と篆書体で書かれたこの三言聯の作品は、落款からは一九八一年の作であることがわかる。梅舒適が主宰していた篆社発行の篆刻雑誌『篆美』第五五集⁽³⁾に、「金石楽 書画縁」を揮毫する様子を収めた写真が掲載されている。また、そこには、一九八一年、岐阜高島屋での呉昌碩書画展において、交換揮毫が行われたことが記載されている。つまり、そこで交換された作品が現在

は西泠印社に収蔵されており、一人一点のこの展示において、梅舒適の一点として、陳列されていたのである。



図3 梅舒適「金石楽 書画縁」

三点目は、沙孟海の「石友紅情切磋商藝 新邦盛業鼓舞沼平」である。吳昌碩の晩年の弟子である沙孟海は第四代西泠印社社長で、梅舒適とも親交が深かった。その沙孟海の八言聯の作品は行草体で書かれていた。また、落款からは沙孟海が社長に就任する前の一九六三年、西泠印社六〇年記念の時に書かれていることがわかる。沙孟海については、日本で展示される機会は少なく、作品を実際に見るのはじめてであり、貴重な機会となった。

以上三点を挙げたが、その他にも印象深い作品は多かった。日本

人では、梅舒適の他に河井荃廬、長尾雨山、青山杉雨、小林斗盦ら一三名の展示があった。また、中国人では、沙孟海の他に梅舒適と親交の深かった王个簃、諸槩三、来楚生、方去疾らの作品も実際に見ることができた。

また、現社員の作品は、印材についてはガラスケース内での展示であったが、書画作品についてはガラスの額なしで鑑賞することができた。日本人の作品は一点あり、日本篆刻家協会からは多田龍淵、山下方亭、尾崎蒼石、小朴圃、井谷五雲、真鍋井蛙、喜多芳邑の諸先生七名が書作品を出展されていた。

書、画、篆刻の魅力溢れる作品が、これほどの規模で一堂のうちに会する展覧会を観覧したことははじめてで、西泠印社一二〇年の歴史の長さとその偉業を、身をもって感じる事ができた。

以上二つの展覧会は浙江展覧館二階を会場としていたが、つづいて観覧した「西泠印社社蔵捐贈菁華展(2019-2023)」は同三階を会場としていた。この展覧会は二〇一九年から二〇二三年までの間に各界から寄贈された作品が展示されていた。そこでは、今回、名誉副社長に選出された高木聖雨氏が寄贈された吳昌碩の印「癖斯」も展示されていた。

三つの展覧会観覧の後、浙江展覧館から少し離れた杭州画院美術館に場所を移し、「2023海内外印社聯展」を観覧した。この展覧会では中国内外の七三の印社による印屏の展示が見られた。日本からは「全日本篆刻連盟」「日本篆刻家協会」「扶桑印社」「日本篆刻会」「全日本華人印社」の五つの印社の作品が展示されていた。一

つの印社につき三幅の展示であり、印社ごとに印屏の作り方に違いが見られ、非常に興味深かった。また、日本ではなかなか見ることのできない、中国、台湾、韓国で現在、活躍している篆刻家の作風を見ることができたのも、篆刻芸術の世界の広さを感じ刺激をうける経験となった。

以上、四つの展示を観覧した。この四つの展覧会の会期は二〇二三年一月七日から二〇日までであった。

なお、もう一つの「君匋芸術院蔵叢翠堂四家名印展」は、二〇二三年一月四日から一七日まで、浙江展覧館、八、九号ホールにての開催で、錢君匋の印八〇顆と錢君匋が収蔵していた趙之謙、呉昌碩、黃牧甫の印四〇顆を展示するものであったが、時間の関係上、残念ながら観覧できなかった。

3 学術研究会

一二〇年記念大会にあわせて、一月一日の大会二日後の一三日から一四日にかけて、「西泠印社第七回『孤山証印』学術研究会」が開催された。「孤山証印」と題する学術研究会は、第一回が二〇〇五年に開かれ、以降、三年おきに開催され、今回、第七回目を迎えた。記念大会は五年おきであるから、二〇〇八年以来の同時期開催となった。筆者は参加できなかったが、記念大会で配布された『西泠印社第七届『孤山証印』学術研討会論文集』⁽⁴⁾からその内容がわかる。

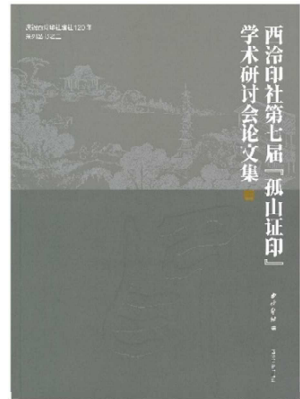


図4 『学術研討会論文集』

序文は、記念大会で挨拶を行った、西泠印社副社長の陳振濂氏が書いている。陳振濂氏は中国書法史研究の多くの著作があるのみならず、大部で精緻な『日本書法史』⁽⁵⁾の業績もあり、日中書法の交流に深い理解をもっている。その序は、西泠印社の節目を、一九〇四年の出発期（萌発）、一九一三年の成長期（成長）、一九五六年から一九六三年の転換期（中興）、一九七八年の改革開放（再生）、二〇〇三年の百年社慶（全盛）の五つとし、西泠印社の歴史を概観し、一二〇年の節目に当たり、「学科交叉」の目標を打ちたてている。この学際的な印学研究は、沙孟海が構想した「国際印学中心」と合致するものだとしている。このような構想のもと、学術研究会は、「二〇世紀以来の中国篆刻と西泠印社の関係」「印学研究と印人研究」「篆刻技法と審美研究」「古璽印と金石書画鑑蔵研究」という四つの部門に分かれて行われている。五〇名あまりの発表があり、中国以外では、日本から三名、韓国から三名であった。日本か

らは、川内佑毅氏が「河井荃廬の訪中および交流」について、愛知学院大学教授の劉作勝氏が「新見長尾雨山詩文稿本考釈」について、久米雅雄氏が「『日本神璽考』―三種の神器と天皇玉璽―」について発表している。

4 記念大会と一連の行事に参加して

以上が西冷印社建社一二〇年慶祝大会と関連行事の概要である。この一連の活動は「人民日報」⁽⁵⁾など中国の多くのメディアで報道されており、注目の高さがかがえる⁽⁷⁾。

ところで、西冷印社の一角には、一九一九年に呉昌碩の盟友であった呉隱とその親族・呉善慶によって建てられた「還樸精廬」という場所がある。そこに掲げられた扁額は、呉昌碩の筆である。筆者にとって今回はじめての訪中であり、さまざまな期待をもつてでかけたのであるが、楽しみにしていたことのひとつがこの「還樸精廬」である。というのは、この扁額のもととなっている呉昌碩の書を梅舒適が収蔵しており、筆者はそれを二〇二一年に兵庫県立美術館で開催された「瀬川コレクション梅舒適コレクション受贈記念展」で見えたからである。この書は、現在、兵庫県立美術館の梅舒適コレクションに入っており、呉昌碩生誕一八〇年を記念して、二〇二四年一月一三日から四月七日まで開催される「生誕一八〇年記念呉昌碩の世界―海上派と西冷名家―」においても、この「還樸精廬」

の書作品が展示されている⁽⁸⁾。西冷印社ではこの他にも呉昌碩の扁額が多く見られた。

西冷印社内の呉昌碩記念室では、記念大会の祝辞で、高木聖雨氏が話題にされた呉昌碩の胸像が置かれていた。一九八〇年のこの胸像の復元には次のような経緯がある。一九二一年、日本の彫像家・朝倉文夫が呉昌碩の胸像を二体制作し、一体を日本に置き、一体を西冷印社に寄贈した。一九七九年、読売新聞社社長・小林與三次が



図5 扁額「還樸精廬」



図6 呉昌碩 篆書「還樸精廬」



図8 「西泠印社建社
八十五周年紀念碑」



図7 「吳昌碩先生像」

西泠印社を訪れた際、その銅像が文化大革命によって破壊されたことを知り、帰国後、吳昌碩先生胸像復元委員会を組織し、朝倉文夫の弟子・西常雄が一体を制作し、一九八〇年に寄贈を行った⁽⁹⁾。
西泠印社の正門を入ってすぐの場所には、一九八八年、西泠印社建社八五年の時に記念して作られた当時の社員のサイン入りの碑が建てられていた。そこには、この時の日本篆刻家協会友好訪中団の

団長を務めた梅舒適の名前も刻まれている。

日本篆刻家協会は、この一九八八年に開催された西泠印社建社八五周年の時から毎回、記念大会に参加している⁽¹⁰⁾。それより前の一九八三年の西泠印社八〇年慶祝大会には、日本（関西）書法篆刻家友好訪中団としての参加であったが、その時の様子は、篆社で作成された「日本篆刻家友好訪中団記録」⁽¹¹⁾に記録されている。筆者は、今回の訪中前にこの記録を見る機会があった。そこには日程とともに、参加者の感想がそれぞれ掲載されている。多くの参加者が印象深い出来事として挙げていたのが、当時の西泠印社社長の沙孟海をはじめとする中国の名だたる書家たちとの「書会」であった。実際の制作の様子を見ることができるとこのような「書会」を非常に楽しみにしていたが、今回は行われず、その機会に恵まれなかった。この点は残念であったが、双甲子という節目の大会に参加でき、西泠印社の伝統を感じ、多くの作品を実見し、中国篆刻界との交流をもてたことは、なにもものにもかえがたい経験となった。

注

(1) 筆者が研究対象としている梅舒適先生、その弟子で、筆者の師である真鍋井蛙先生をはじめ、日本篆刻家協会の先生方のサイン、また、筆者の恩師である奈良教育大学教授の豊田宗児（豊散山）先生のサインも見ることができた。

(2) 『吳昌碩全集』（普及版）第一冊 絵画巻（上海書画出版社、

二〇二二年)

- (3) 『篆美』第五五集(篆社、一九八一年、二二頁)
(4) 『西泠印社第七屆「孤山証印」學術研討會論文集』上下(西泠印社出版社、二〇二三年)。なお、この論文集の他に、『西泠印社社員作品集』上下(西泠印社出版社、二〇二三年)、『2023海内外印社聯展作品集』上下(西泠印社出版社、二〇二三年)が二〇二〇年記念大会の参加者全員に配布された。

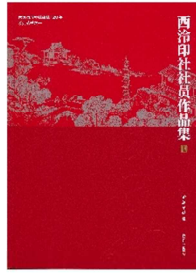


図9 『西泠印社社員作品集』

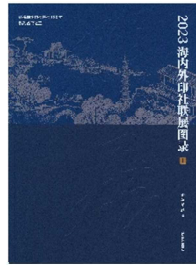


図10 『2023 海内外印社聯展作品集』

- (5) 陳振濂『日本書法史』(上海書画出版社、二〇一八年、全四四頁)
(6) 「人民日報」二〇二三年一月一三日發行版
(7) 筆者たちが「2023海内外印社聯展」を観覧中、地元メディアの要請で、日本篆刻家協会常任顧問の井谷五雲先生が日本篆刻家協会を代表して取材に応じていた。

- (8) 柏木知子「清・呉昌碩書 篆書還樸精蘊」(『國華』第一五三九号、朝日新聞社、二〇二四年)に解説がある。
(9) このことについては、『西泠印社一一五年社慶專輯』(西泠印社、二〇一八年、四九頁)を参考。
(10) 日本篆刻家協会の発足は一九八五年のため、日本篆刻家協会としては八五年記念大会が初参加である。八〇年記念の際には、梅舒適を団長とする篆社のメンバーで結成された訪中団で西泠印社の大会に参加している。
(11) 「一慶祝西泠印社八十周年——日本篆刻家友好訪中団記錄」(篆社、制作年記載なし)

[付記1] 図版典拠

- 図1、図2、図3、図5、図7、図8 筆者撮影
図4 『西泠印社第七屆「孤山証印」學術研討會論文集』上(西泠印社出版社、二〇二三年)
図6 生誕一五〇年記念『呉昌碩作品集』
図9 『西泠印社社員作品集』上(篆社・日本篆刻家協会、一九九四年、六九頁)
図10 『2023海内外印社聯展作品集』上(西泠印社出版社、二〇二三年)

〔付記2〕本報告は、阪神中哲談話会第四〇六回例会（二〇二三年

一二月一六日、関西大学）にて発表したものをもととしている。

当日、参加のみなさまから貴重なご意見をいただきましたことに感謝申し上げます。また、今回の訪中でお世話になりました日本篆刻家協会の諸先生方に深く御礼申し上げます。

（本学大学院修士課程）